

# 市民参加のまち育てのプロセスに関する研究(その3)

## ・習志野市大久保をケーススタディとして・

日大生産工 川岸 梅和

日大生産工(院) 山縣 乃亜

### 1 はじめに

本稿は、前稿に引き続き千葉県習志野市大久保地区をケーススタディとした市民参加・まち育てのプロセスに関する一連の研究である。前稿では、市民団体《ほっと・はぁ〜と・おおくぼ》の活動と、習志野郵便局旧局舎利用計画に関連する準備会、定例会、ワークショップなど(2001年6月30日~2003年9月28日)の活動報告、及び活動過程を通して、今後の市民参加型におけるまち育ての普遍性を持ち得る状況づくりについて報告した。

本稿では、市民の強い請願に端を発した習志野郵便局跡地に建設予定の公共施設づくりの中で、基本構想づくりに関する市民参加・協同(働)のプロセスの動向と特性を明らかにすることを目的とする。

### 2 調査方法

本研究では、現実のフィールドにある「まち育て」の現場に継続的に自ら参加し、その合意形成・意思決定のプロセスと参加型の市民活動の中で体験・経験を共にしながら共有すべき知見を発見し概念化してゆく実践的研究(アクション・リサーチ)を行うと共に、次の段階へと進んでいく中で必要とされる相互理解・浸透・変容の生まれる状況を創出するためにも、各回で得られた意見の集積・分析を行っている。

### 3 習志野郵便局旧局舎利用計画の経緯

習志野郵便局旧局舎用地の利用のあり方に関しては、行政・市民それぞれが検討を行った経緯がある。行政の検討プロジェクトは平成12年に設置され検討を重ねた。地域住民から2度にわたる習志野郵便局の跡地取得の請願を請け、平成15年には関東郵政局が

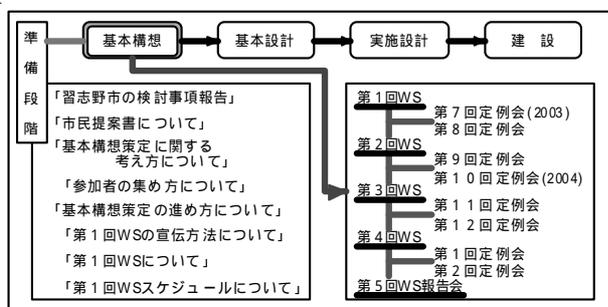


図 - 1 習志野郵便局旧局舎利用計画の経緯

ら跡地を取得した。市民団体《ほっと・はぁ〜と・おおくぼ》及び大久保・泉・本大久保まちづくり会議から市民提案書が提出されてからは、市と市民の協働のもと、市民参加で施設づくりを行うことを掲げ、市民・行政・大学研究室が共に準備会を重ね、平成15年9月、第1回習志野郵便局跡地利用基本構想についての会議(2003年、9月、11月、2004年1月、3月、5月)が行われた。2ヶ月に1回のペースで行われるワークショップ形式の会議が開始してからも、《ほっと・はぁ〜と・おおくぼ》の定例会に行政も参加し各回のまとめ・準備についての話し合いを行った。(図-1)

### 4 参加者の属性

全5回の会議は、延べ275名の市民の参加を得て、ワークショップを行いながら進められ、第3回が119名と最も多かった。(図-3)市民参加者の属性(性別)は、ほぼ同じ割合となっている。年齢別に見てみると、各回ともに60才代の割合が最も高く、次いで70才代、50才代と続いている。参加者の居住地を見ると、跡地周辺の大久保・泉・本大久保地域からの参加者が半数以上を占めているが、第3回に関しては市内の他の地域からの参加が最も多くなっているように、跡地周辺だけではなく市内の各地域に分布している。また、参加者の職業については、無職の割合が31.9%と最も高く、有職者29.4%、主婦12.6%となっている。(図2)

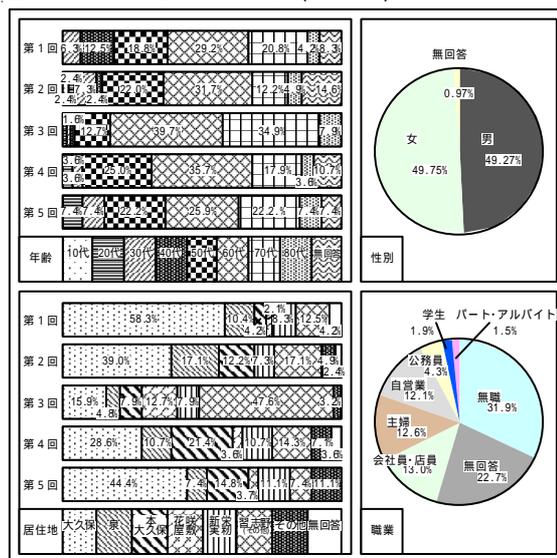


図 - 2 参加者の属性

## 5 ワークショップの内容と経過 (図 - 3)

前稿で詳述したように、第1回では、ワークショップとは別に協働(同)することの楽しさ・幸せを「スヌーピーから学ぶこと」と題し、絵本を紹介しながら「Share」という言葉にまとめた。そして、3グループに分かれワークショップを行った。事前に《ほっと・はぁと・おおくぼ》の定例会でメンバーの中から3グループのグループリーダーを選定しておき、話し合いがスムーズに進むよう準備した。そして、グループごとに話し合い、市民の“大久保に対する思い・イメージ”をまとめた。参加者にはあらかじめ数枚のポストイットを配布し、話し合いの中で各自の意見をポストイットに記入しグループごとに用意された模造紙へ貼る作業を行った。それらの意見の中には、具体的な活動・空間等に対する意見もあり、第1回から参加し新しい施設を有効的に利用したいという意欲が表れていた。会議終了後、それらの意見を集計整理し、類似する意見ごとにまとめ分析を行った。“安心・安全”“子ども”“学生”のキーワードは各グループにおいて見ることができた。

第2回では、原則として前回に続くグループで“施設のネーミングをしよう”と題し話し合った。Aグループでは、ネーミングのポイントには、施設の機能を表す名称と施設の愛称となる名称の2つがあるとして、第1回でAグループのテーマとなった『異世代交流のできるまち』から「交流」を意識した「八幡つどいの館」「つどいの場」といった意見や、隣接する八幡公園との一体感を目指し“八幡”を冠にした名称も挙げられた。Bグループでは“図書館”“活動ハウス”“カレッジ”という言葉が付いている空間で活動を行うことを前提としているものや、“ほっと”“ふらっと”というように施設を利用する事でやすらぎを感じることでできる名称が挙げられた。Cグループでは、環境を意識した「エコステーション」や、施設によりコミュニティの醸成を願う「とも生きプラザ」という意見が挙げられた。第2回では、個々の思いや活動志向を施設の名称によって表現することで、公共施設づくりのプロセスは自分たちの子供を育てるように、参加と協同(働)により創り上げていくことだという共通意識の確認となった。同時に、「旗揚げゲーム」として「これからのワークショップに参加する意思があるか」等の質問を行った結果、全員が参加するという意思を持っていることが明らかになると同時に、参加者

相互に意識・取り組み方等の共有化がなされた。

第3回では、グループ分けを行わず、跡地で「何をしたいか(活動・行為)」「どのように使いたいか」、跡地で「何を期待するか」「何をしてもらいたいか」として、利用状況を1人・2人・数人の場合とに分け、求められている施設利用方法を動詞でポストイットに書き出した。休憩時間を利用してそれらの意見を余暇活動ごとに分類した後、参加者全員が見て回る時間を設けることで、参加者は異なる意見を持った市民がいることを相互に認識することが出来た。会議終了後、全ての意見を分類・集計した。利用人数ごとに見てみると、1人の場合が最も多く、2人の場合が最も少なかった。また総意見数の9割以上が跡地で「何をしたいか(活動・行為)」「どのように使いたいか」であり、1人の場合では教養・文化活動が最も多く“読書をしたい”、2人・数人の場合では交流活動で“心行くまで話がしたい”“世代を超えた交流をしたい”などが挙げられた。跡地で「何を期待するか」「何をしてもらいたいか」では、全ての場合において、教養・文化活動が最も多く“本を揃えて欲しい”、“習志野の歴史を展示して欲しい”といった要望が挙げられた。

第4回では、第3回のまとめを資料として参加者に配布し、各グループごとに種々の活動を書き出した模造紙を見ながら、話し合いを行い、挙げられた多くの活動の受け皿となる空間及び、その空間に必要な設備を考えた。各グループともに、“ギャラリー”“公園”“多目的”といったキーワードが挙げられた。さらに、“美術室・工作室”“多目的室”は、参加者が所属するサークル活動や趣味を行うなど幅広い活動を行う受け皿として意見が出された。第3回の参加者は、サークルや市民グループからの参加が多く、創作活動をはじめ、その成果を発表する場に対する意見が多く出されていたが、それらの受け皿となる空間とそこに必要な設備を考えていく過程で、スペースが確保されていれば使用方法の工夫を待たせることで多様な活動が行えることを認識しあうことができた。そのため、ワークショップの後半からは新しい活動の意見も増え、施設周辺への配慮や子どもや障害者といった幅広い施設利用者の活動のための空間も挙げられた。

第5回では、第1回から第4回までのまとめとして川岸研究室・行政でまとめた基本構想の報告書を確認しながら、ワークショップでの意見の合意形成を計った。さらに報告会終了後は、事前から市民により提案

プログラム	Aグループ	Bグループ	Cグループ
<b>第1回WS H15.9.28</b> 参加者91名(市民:70名) (大久保公民館・3階集会室) あいさつ・質疑応答 協同・協働とは グループによるWS (3グループに分かれての作業) まとめ アイテム ポストイット 目標・イメージの共有化	<b>"大久保のイメージ・これからのまちのイメージ"</b> <b>《異世代交流のできるまち》</b> 安心・安全のまち(4) ・安心して住めるまち 子どものまち(17) ・青少年の育成に配慮したまち 多世代交流のまち(11) ・多世代のまち 高齢者のまち(10) ・高齢化しているまち 学生のまち(5) きれいなまち(11) ・まちに「目」が向くようなまち まちの活性化(9) ・跡地計画がまち再生のキープポイント 緑のあるまち(11) ・いちよう並木	<b>《壁がなく永く住めるまち》</b> 安心・安全(4) ・安心で安全なまち 子どもの居場所(5) ・子ども達にやさしいまち 壁のないまちづくり(15) ・年代・世代・新旧のとりわれないまち 住民が主人公(3) ・市民の意見を十台にして 学生との協働(11) ・バックアップしあえるまち 住みよいまち(8) ・気軽に声をかけられるまち 愛着のあるまち(7) ・昔の素敵なイメージを大事にしたい ストレスのないまち(6) ・ストレスを感じさせないまちづくり	<b>《明るい・安心・安全なまち》</b> 安心・安全(10) ・子どもが安心して安全に遊べる場 みんなで集まれる場所(15) ・若い人が意見を出せる ・お祭りのできるまち 保健・福祉の充実(9) ・子育て支援 教育・学習の場(7) ・自分達の知恵・力・技を發揮できる場 大久保の現状点(8) ・八幡公園・郵便局跡地をひとつに 公園にはハトが多い 市役所の機能(4)
<b>第2回WS H15.11.22</b> 参加者79名(市民:53名) (習志野市役所・5階会議室) あいさつ・補足説明 旗上げゲーム グループによるWS (3グループに分かれての作業) まとめ アイテム ワークシート 施設への愛着心の創出	<b>老若男女、健常者・障害者のみんなが使える『壁のない』施設</b> ・大久保八幡センター ・八幡つどいの館 ・八幡の名のついた施設 ・貝殻公園にちなんだ名 ・銀杏会館 ・自由ハウス(館) ・つどいの場 ○ネーミングの2つのポイント ・入っている機能を表す名前 ・施設の愛称となる名前 ○八幡公園と一体化させたい ・立派な松ノ木がある ・今は暗くて危ない ・施設により輝かせる ・八幡神社は大久保のルーツ	<b>市立大久保みんなの【防災・学習・福祉・遊び】遊人ピア</b> ・市立習志野図書館 ・市立習志野福祉館 ・習志野自由館 ・市立大久保館 ・市立大久保コミュニティ活動ハウス ・大久保コミュニティセンター ・大久保コミュニティプラザ ・大久保ネイチャーカレッジ ・大久保皆道館 ・大久保プラザ ・NPO立大久保地域住民遊楽園 ・NPO立おおくぼ(みんなの)ほっと館 ・地域立大久保ご近所住民仲間共遊楽所 ・市立大久保青年自由センター ・ふらっとおおくぼ	・エコステーション ・NPO立習志野自然環境活動スペース ・市立習志野美術館 ・市立ほっと・はぁ〜と憩いの館 ・とも生きプラザ ・風の人・土の人共和(和む)スタジオ ・ほっと・はぁ〜と習志野館 ・習志野八幡館 ・明るい公園 ・大久保広場 ・習志野くらしの広場 ・スペース大久保 ・スタジオ大久保 ・スタジオ大久保 ・地域市立大久保・習志野 地域住民共遊文教ホームハウス ・遊ゆう館・遊びの館 ・昭和館 ・保育室、支援センター
<b>第3回WS H16.1.24</b> 参加者114名(市民:90名) (大久保公民館・1階集会室) あいさつ・補足説明 WS (各自用意された ポストイットに意見を記入) まとめ アイテム ポストイット 施設での活動の具体化	<b>"跡地で「何がしたいか(活動・行為)」「どのように使いたいか」"</b> <b>"跡地で「何を期待するか」「何をしてもらいたいか」"</b> 1人の場合・2人の場合・数人の場合の3つのケースを想定し 施設に対する想いを抽出する。 ↓ 出てきた意見を、9つの余暇活動と社会性余暇活動に分類し その場で意見結果を確認する。		
<b>第4回WS H16.3.20</b> 参加者57名(市民:34名) (習志野市勤労会館 1階研修室) あいさつ・補足説明 グループによるWS (3グループに分かれての作業) まとめ アイテム ポストイット 空間形成	<b>Aグループ "活動の受け皿を考えよう"</b> ・陶芸室・美術室・工作室→ろくろ・机・椅子 ・市民ギャラリー→机 ・映画室→スクリーン機器 ・市の出張所→市の情報発信 ・生涯学習の拠点 ・大きなロビー ・多目的大ホール→ソファ ・展示室→テーブル ・異世代の交流の場→昔の遊び道具 ・オープンカフェ→テーブル・椅子 ・庭・小さい日本庭園→ベンチ・緑側	<b>Bグループ</b> ・可動式ギャラリー→展示に必要な備品 ・映画館→スクリーン ・コンサートホール→可動式舞台 ・公園→噴水・ベンチ ・体育館→ネット・ボール ・中古家具展示場→ハンガー・スタンド ・日本館→畳スペース ・広いロビー→子どもロビー ・集会スペース→椅子・机 ・何でも相談室→見合った専門家 ・オープンカフェ→ソファ	<b>Cグループ</b> ・美術館→ろくろ・水道 ・多目的室→パネル・フック ・ギャラリー→ついたて・パネル ・パーソナルユース→大画面 ・舞台→ステージ ・談話室→机 ・日本庭園→ベンチ ・ボランティア→仕切り ・集えるできる場→椅子・机 ・育児室→ソフトウェア ・セミナー室
<b>第5回WS H16.5.22</b> 参加者58名(市民:28名) あいさつ 報告 交流会 WS=ワークショップ			

図-3 WSの内容と経過

され、準備していた交流会を行った。司会進行は参加者が勤め、大久保のまちの現状について話し合う機会を再度持った。

## 6 ワークショップ参加者の意識について(図-4)

第5回では、市民参加者に対して習志野郵便局跡地利用基本構想ワークショップについてのアンケート調査を行った。回答者27名のうち半数以上が各回のワークショップに参加していた。市民参加者の現在の居住地での居住年数は一様ではなく、昔からの居住者や新しく移り住んできた居住者など幅広い参加者がいることが分かった。また、ワークショップには1人で参加した人が多く、次に友人と共に参加している人が多い。参加後では、知人・友人ができたという回答している人が半数を超えている。ワークショップ参加以前に跡地計画の経緯・内容を知っていた参加者はほぼ半数であった。ワークショップの話し合いでは、参加者同士でコミュニケーションがとれたと回答している

人は8割を超え、自分の意見が届いたと回答している人、楽しく参加できた人、積極的に参加できた人は7割を超えていることが明らかとなった。

## 7 まとめ

習志野郵便局跡地への公共施設づくりワークショップは習志野市初となる市民参加型まちづくりの第1歩である。そして、習志野市の場合、市民参加から協働へのムーブメントは、「市民の意識」「まちづくり会議の活動」「まちづくりパートナーシップ新世紀事業」等、個々人あるいはグループ、行政の持続的なまちに対する想いと活発な活動によるところが大きいと考えられる。

また、一般的には、行政から指名された特定の市民が参加する市民参加型のまちづくり会議手法が多い中で、不特定多数の市民に呼びかけ、不特定多数の市民が参加し、1回毎にテーマを決め、ワークショップを行いながら対話や議論を積み上げて、市民が主体的にまちづくりや公共施設づくりに関わることの出来るこのような方法は、全面的に行政に依存する旧来の方法から脱却し、「参加」と「協働」ですすめるまちづくりという理念に立脚した状況を具現化したと言えるであろう。

更に、参加者の自由な発想と市民ならではの創造的思考を引き出す専門性を持ったコーディネーターと市民参加者をリーダーとして進められたグループによる話し合いからは、予定調和型結論へと導くワークショップではなく、意見や議論が積み上げられていく過程を経て、参加者の自己責任を持ちえた自発的結論が紡ぎ出されると言えよう。このような状況づくりを確立するためには、専門家による各段階における意見の集積・分析が必要であり、それを解説することにより、参加者の意見の振り返りを促すことにつながると言えよう。

## 8 今後の課題

今後、基本構想としての「きもちづくり」からワークショップ手法を用いながら個々の想いを具現化する「かたちづくり」へとイメージの空間化を行っていく基本設計づくりの過程で、市民参加者の施設への想いがどのように反映されていくかが重要であり、実現に向けて検討・検証を重ねていくことが必要である。また、行政がどのように情報を市民に対し公開し、まち育てのプロセスを進めていくかという情報開示の有り様についても今後継続的に検証を重ねる必要があると言えよう。

### 参考文献

習志野市役所 『習志野郵便局 旧局舎用地の利用に係る基本構想 報告書』

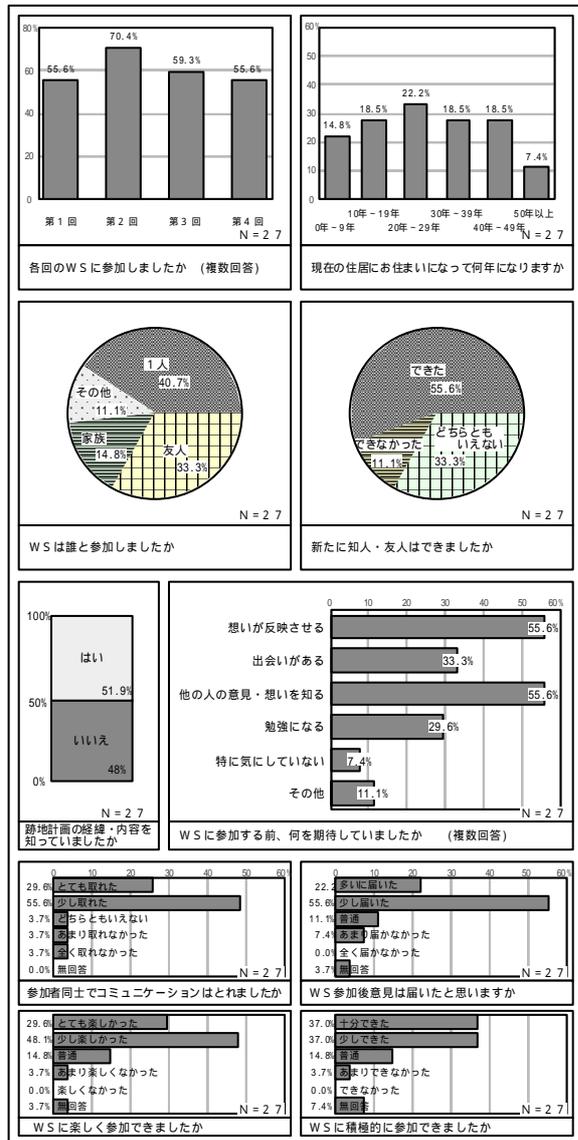


図-4 第5回 報告会にて行った意識調査